

現代文の基礎

吉田精一 著

現代文の基礎



Obunsha

● 図書案内(小・中・高・一般別)送呈
〒162 東京都新宿区横寺町 旺文社

法人団 日本教育協会の
財団 (通信教育) 雑誌・放送(百万人の英語)
法人 日本L.L.教育センター(11教室)

事業

模範試験・実力テスト
全国学芸科学コンクール
通信添削指導

放送

大学受験ラジオ講座

書籍

戦国・歴史・展覧
旺文社百科事典(エポカ)
教科別学習大事典(エポカ)

チャイルドエポカ
学習図鑑・科学書

文庫・児童書・スポーツ書
辞典・語学教材

(小・中・高)参考書
教科書・語学教材

雑誌

JK高1時代
雪高二時代
代

中高1時代
高三時代
代

中二時代
中三時代
代

中一時代
大学受験ラジオ
講座TEXT

螢雪短大
O M N I
(オムニ)

内部交流

S71/18 (日6-2/128)

現代日語の基礎

GB000240

現代文の基礎

1978年2月10日 初版発行
1983年11月10日 再訂版発行

著者 よし 吉 田 精 一

発行人 赤 尾 好 夫
編集人 中 山 行 雄
印刷所 旺文社 日新印刷株式会社
合資会社 中村印刷所
製本所 株式会社 市川製本所

発 行 所 株式会社 旺 文 社
162 東京都新宿区横寺町
電 話 (編集) 03-266-6318, (販売) 03-266-6410

乱丁・落丁はお取りかえしますので
本社に直接お申し出ください

310181 (許可なしに転載、複製することを禁じます)

© 吉田精一 1983

Printed in Japan

ISBN4-01-037842-5

はしがき

現代国語の力の修得は、あらゆる他学科の基礎をなすものである。英語以下の外国語の根本は国語の力のいかんによるものであり、その他社会科学の諸科目はいかに及ばず、数学や理科系統の課目の学習にも、問題を判断し、分析するのは、国語の力によるものといつてよい。

古典、古語の場合とちがい、現代国語の課題は、複雑な思想や、入り組んだ文脈を、いかに読解し、判断し、さらに批判するかという、思索力、推理力、分析力の養成にある。そのためには、原文の主旨をとらえ、文章の書き手の意図を判断し、適当な自己の批判を加える技術を身につける必要がある。それは個々のケースをつらぬく法則的なものを体得することにはかならない。

そうした法則的なものを、実際の多くの場合にあてはめ、応用すること
で現代国語の基礎学力を、自分のものにすることができるであろう。

本書は、そういう考えから、日常座右において、常に参考に供する目的で編集された。読者がこの書によって、現代国語を理解する基盤を獲得され、多くの実例にあたつて、容易に解剖する力を身につけられることを期待してやまない。

なお、編集にあたっては、大妻女子大学の池内輝雄、源五郎両君の熱心な協力を得た。両君はともに現代文学研究家として、名声のある人々である。ここに両君の名を記して感謝の意を表する。

昭和五十三年 初春

著 者

この度、高等学校教育課程の改訂にあわせて「現代文の基礎」と改名し、従来の良さを生かしながら、教科書により即応した日常学習書とした。今回も編集にあたっては、前記の池内、源両君の協力を得た。

昭和五十八年 十月

〔著 者 紹 介〕

吉田精一（よしだ・せいいち）明治四十一年（一九〇八年）東京生まれ。東京大学卒。東京大学文学部教授、東京教育大学教授等を歴任。現在、大妻女子大学文学部長、文学博士。「現代文学論大系」（編著）で芸術選奨（文部大臣賞）、「自然主義の研究」で日本芸術院賞を得た。他に、「現代文学と古典」「近代文芸評論史 明治篇」等著書が多い。「文学入門」（旺文社）、「新研究 現代国語」（同）、「評釈 現代評論・随想」（同）、「評釈 現代詩歌」（同）等で高校生にもなじみ深い。

目次

はしがき	一
この本の構成と利用のしかた	九

基礎編

第一章 全体解釈の方法

1 主題

『例文』 「青い時間」	羽仁 進	四
-------------	------	---

本のおもしろさ、というのには、二つの面があると

『例文』 「小景異情」 (その三)	室生 犀星	八
-------------------	-------	---

銀の時計をうしなへる／ところかなしや

2 構成

『例文』 「具象以前」	湯川 秀樹	九
-------------	-------	---

ある科学者が画期的な発見をするとか、基本的に

3 段落

『例文』 「詩を読む若き人々のために」		二五
---------------------	--	----

ルーイス・深瀬 基寛訳

もしも皆さんが浜辺に来て、一枚の銅貨——古ぼけた、

4 大意・要旨

二九

『例文』 「案内者」	寺田 寅彦	三二
------------	-------	----

どこかへ旅行がしてみたくなる。しかし別に

5 速く、的確に読むための方法

『例文』 「心で見る観光旅行」	島崎 敏樹	三五
-----------------	-------	----

近ごろの観光旅行は、たいそう便利になつて、

練習問題 一〜四

三八

第二章 部分解釈の方法

1 語句の解釈

『例文』 (句集『葦花』より)	飯田 蛇笏	四四
-----------------	-------	----

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

『例文』 「思想の花びら」	亀井勝一郎	四七
---------------	-------	----

我々は皆非凡であらうとして、いつも自分に無理を

2 指示語

『例文』 「友情について」	矢内原 伊作	四九
---------------	--------	----

大人になつてからは親友ができにくく、若いときに

『例文』 「麦藁帽子」	堀 辰雄	五〇
-------------	------	----

夏休みが来た。寄宿舎から、その春、入寮したばかり

3 比喩

『例文』 「私の個人主義」	夏目 漱石	五一
---------------	-------	----

五二

私は、この世に生まれた以上何かしなければならん、	
【例文】「歩哨の眼について」	大岡 昇平……………五五
このほば幅百五十メートル縦一キロの矩形の地面を、	
【例文】「曇天」	中原 中也……………五八
ある朝 僕は 空の 中に、/ 黒い 旗が	
4 対句的表现……………五六	
【例文】「山月記」	中島 敦……………五九
なぜこんな運命になったか判らぬと、先刻は言ったが、	
5 逆説……………六二	
【例文】「なまけもの論」	北 杜夫……………六三
ところが実際のオセッカイやきは、もっとやっかいで	
【例文】「空に虹を見る時」	ワーズワース……………六四
空に虹を見る時/わたしの胸は躍る	
6 倒置法……………六六	
【例文】「おふくろ」	田中 千禾夫……………六七
英一郎 おつ母さん。/坂 はい。	
【例文】「樹下の二人」	高村 光太郎……………六八
ここはあなたの生まれたふるさと、/あの小さな	
7 例示……………七〇	
【例文】「エスプリとユーモア」	河盛 好藏……………七〇
人間どうしのつきあいは、いつも春風胎蕩という	
【例文】「単純さと頑固さ」	遠山 啓……………七三
漱石の「坊っちゃん」の主人公も山嵐も数学の教師	
8 暗示的表现……………七四	

【例文】「山月記」	中島 敦……………七四
少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映して	
【例文】「たけくらべ」	樋口 一葉……………七八
正太は潜りを明けて、ばあと言ひながら顔を出すに、	
9 反語法……………七八	
【例文】「民権自由論」	植木 枝盛……………七八
世のことわざにも不知是天福と申すとおりで、	
【例文】「大渡橋」	萩原 朔太郎……………八〇
ここに長き橋の架したるは/かのさびしき惣社の	
【例文】「鼻」(『侏儒の言葉』より)	
芥川 龍之介……………八三	
クレオパトラの鼻が曲がっていたとすれば、	
10 言い換え……………八五	
【例文】「硝子障子のシルエット」	島尾 敏雄……………八五
今度神戸から東京に引越してきた。今度の引越し	
【例文】「ふだん着・よそゆき」	犬養 道子……………八六
わたしがバりに留学中の二か年半、家の一室を与えて	
ユーモア……………八九	
【例文】「エスプリとユーモア」	河盛 好藏……………八九
イギリス人が戦争中でも、けってユーモアを失わ	
【例文】「正岡子規宛書簡」(明治34年4月20日付)	
夏目 漱石……………九〇	
こんな国ではちっと人間の背いに税をかけたらずしは	
練習問題 五十八……………九二	

ミロのヴィーナスをながめながら、彼女がこんなにも

「一六」 「埋もれた古代都市」

森本 哲郎……二八

私は、なぜか砂漠に心ひかれる。

「一七」 「生まれて」

茨木 のり子……三四

かなしみ 谷川俊太郎 / ああ青い空の波の

「一八」 「新しき詩歌の時」

島崎 藤村……三〇

つひに、新しき詩歌の時は来たりぬ。そは美しき曙の

練習問題 二〇～二三……三六

第三章 詩

「一九」 「小景異情」

室生 屋星……三四

ふるさととは遠きにありて思ふもの / そして悲しくうたふ

「二〇」 「永訣の朝」

宮沢 賢治……三九

けふのうちに / とほくへいつてしまふたくしの

「二一」 「Enfance finie」

三好 達治……三七

海の遠くに島が……、雨に椿の花が堕ちた。

練習問題 二四～二八……四〇

第四章 短歌

「二二」 「近代の短歌」

正岡 子規……二六

くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の

瓶にさす藤の花ぶさみじかければ

伊藤 左千夫

おり立ちて今朝の寒さを驚きぬ
鶉頭の紅ふりて来し秋の木や

長塚 節

馬追虫の鬚のそよるに来る秋は

白堊の瓶こそよけれ霧ながら

「二三」 「近代の短歌」

与謝野 晶子……三〇

その子二十櫛にながる黒髪の

歌にきけな誰れ野の花に紅き香む

北原 白秋

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと

昼ながらかすかに光る螢一つ

若山 牧水

白鳥は哀しからずや空の青

幾山河越えさり行かば救しさの

石川 啄木

やはらかに柳あをめる / 北上の岸辺目に見ゆ

「二四」 「近代の短歌」

島本 赤彦……三七

信濃路はいつ春にならむ夕づく日

斎藤 茂吉

死に近き母に添ひ寝のしんと

釈 迢空

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。

木下 利玄

牡丹花は咲き定まりて静かなり
練習問題 二九〇三三

第五章 俳句

『二五』「近代の俳句」一

いくたびも雪の深さを尋ねけり
痰一斗糸瓜の水も間にあはず

正岡 子規

遠山に日の当りたる枯野かな
白牡丹といふといへども紅はのか

高浜 虚子

『二六』「近代の俳句」二

赤い椿白い椿と落ちにけり
曳かれる牛が辻ですつと見廻した秋空だ

河東 碧梧桐

小春日や石を噛み居る赤蜻蛉
冬蜂の死にどころなく歩きけり

村上 鬼城

芋の露連山影を正しうす

飯田 蛇笏

桑の葉の照るに堪へゆく帰省かな

水原 秋桜子

夏の河赤き鉄鎖のはし浸る

山口 誓子

つきぬけて天上の紺曼珠沙華
『二七』「近代の俳句」三

三九三

万緑の中や吾子の蘭はえそむる

中村 草田男

雉子の眸のかうかうとして売られけり

加藤 楸邨

バスを待ち大路の春をうたがはず

石田 波郷

練習問題 三四〇三九

三九五

整理編

三九七

第一章 文学史

三九八

I 小説

『一』 啓蒙期

四〇〇

『二』 写実主義

四〇〇

『三』 浪漫主義

四〇二

『四』 自然主義

四〇三

『五』 漱石と鷗外

四〇五

『六』 耽美主義

四〇六

『七』 理想主義

四〇七

『八』 理知主義

四〇八

『九』 大正から昭和へ

四〇九

【一〇】戦後文学

2 近代詩

3 短歌

4 俳句

5 戯曲

第二章 漢字

【一】特別音訓の使い方

【二】類義同訓の使いわけ

【三】類義同音の漢字の使いわけ

【四】類義同音の熟語の使いわけ

【五】おもな四字熟語

付録

現代文重要用語集

解答

演習室解答

練習問題解答

索引

—— 冊目記事 ——

〔途中下車〕

志賀直哉と父

漱石と自転車

「盗まれた手紙」

「網走まで」

「初恋」

朔太郎の詩評

宮沢賢治と詩

子規の短歌革新運動

「山のあなた」

蕪村の句と子規

自由律俳句とは？

俳句の力学

学生生活歳時記

この本の構成と利用のしかた

1 構成

この本は、高等学校に入学して初めて「現代国語」を学ぶ諸君や、「現代国語」の実力をもっと高めたいと思っている諸君のために説いたものである。

全体は、「基礎編」「実践編」「整理編」の三編に分けてある。必要に応じて、そのどこから学習を始めてもかまわない。ただし、勉強を始めたばかりの諸君や、自信のあまりない諸君は、ぜひ基礎編から順に読み進めることをすめたい。

第一編 基礎編

「現代国語」では、いったいどんなことを学ばばよいのか。ここではその要点と方法を、具体例をあげながら説明してある。

(1) 全体解釈の方法……文章を読んで、全体で何を言おうとしているのかがわからなければ、それは「読んだ」ということにはならない。ここでは、全体をとらえることを目標に、主題・構成・段落・大意・要旨・速く、的確に読むための方法などを学習する。

(2) 部分解釈の方法……文章全体の意味に迫るためには、部分的確にとらえなくてはならない。ここでは、部分に着目し、語句の意味・指示語・比喩・対句的表現・逆説・倒置法・例示・暗示的表現・反語法・言い換え・ユ・モアなどを学習する。

(3) 文法を応用した解釈の方法……ここでは、解釈のための文法の基礎力を、文の構造と接続関係から学習する。

以上、「現代国語」の基礎力が多角的に養えるよう工夫してある。説明・例文・まとめを理解するとともに、練習問題でぜひ力を試してほしい。練習問題はやさしいものから難しいものへと配列してある。

第二編 応用編

「基礎編」が終わったら、いよいよ、実際の文章の読解に入る。ここでは、小説・戯曲・評論・随筆・詩・短歌・俳句の五章に分けて説明してある。諸君が「現代国語」で習う文章

の分野（ジャンル）は、すべてここに集められている。

(1) 学習の要点……各章のはじめに、見開きで、その章で学ぶことがらや態度・方法を示し、要点を指摘してあるので、能率的に学ぶことができる。

(2) 例文……例文は、教科書を基準にして、近代の文章の中でも名作のはまれ高いものを精選した。それぞれの例文には、その特性に応じて、△着眼▽△語句▽△要旨▽△学習▽△文の構成▽△参考▽△途中下車▽の欄を設けて、総合的に読解・鑑賞がなされるよう工夫してある。

(3) 演習室と練習問題……各例文の最後に演習室を、章の最後に練習問題を配してある。練習問題は、できるだけ多く頁をとり、これによって問題集の用を兼ねるようにしてある。

第三編 整理編
整理編では、文学史と漢字についてまとめている。文学史は、代表作品と文芸思潮を対比しながら整理しており、漢字は、誤り易いものを中心にまとめている。

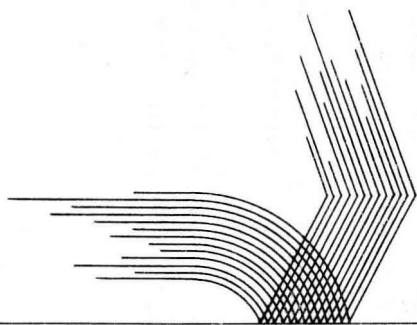
2 利用のしかた

〔1〕 通読し、精読する……この本は、「現代国語」の基礎力を確かにすることを主眼において書かれている。もし、諸君がこの本を完全にマスターするなら、高校時代を通じてもはやこの他の参考書は必要でないと云っていい。そこで、まず、全体を通読し、「現代国語」の理解のしかたや要所をつかんでほしい。その上で、こんどは精読し、しっかり身につけてほしい。

〔2〕 教科書と併用する……教科書と併用することもない。授業での疑問点が、この本によって解決できるならば、「現代国語」の実力は一段と飛躍するにちがいない。

〔3〕 演習室を活用する……これはこの本の特色である。いま読んだことがはたして着実に自分の身についているかを反省し、さらに一段と正確な理解力を体得するために、ぜひ活用してほしい。

基礎編



第一章 全体解釈の方法

全体をとらえる

全体と部分

「山に入って、山を見ず」ということわざを、耳にしたことがあるだろう。山全体の姿は、遠くで眺めた方がよくわかる。山に近づき、山の中に深く入りこめば入りこむほど、かえって山全体の姿はぼやけてしまう、という意味である。

しかし、その代わり、山深く入りこむことによって、遠くで見えていたのではわからなかった、山そのものの具体的な姿が見えてくるかもしれない。複雑な変化に富んだ大地の起伏、いろいろな動植物の実態、さらには大気のすがすがしさ、など。

山を、ほんとうによく認識するためには、遠くから全体的にとらえることと、近づいて行って部分的にとらえることの二つが、どちらもたいせつなことにちがいない。この二つの作業を補い合わせ、わたしたちはじめて、「その山がわかった」と言えるのではなからうか。

巨視と微視

文章を読んで理解すること（これをふつう読解という）も、山の認識のしかたとよく似ている。巨視的に全体をとらえることと、微視的に部分をとらえることのどち

らか一方を欠いたとしても、読解は不十分になってしまう。
この章では、まず、全体の把握に重点を置いて考えることにしよう。その具体的な方法として

1 主 題

2 構 成

3 段 落

4 大 意・要 旨

5 速く、的確に読むための方法

を考えてゆく。

つづいて、第二章では、部分をとらえる方法を、第三章では、文法を応用した解釈の方法を学習する。合わせて文章の読解の力を養ってもらいたい。

この「基礎編」が終わるころには、諸君の現代国語の力はかなりのところまで達しているはずである。「千里の道も一里から」という。さっそく勉強を始めよう。



(朝霧高原より富士山を望む)

1 主 題

主題とは？

文章を読むことにおいて、もっとも大切なことは、その文章が言おうとしていることの中心をつかむことである。これがつかめなければ、文章を読んだとは言えない。たんに眺めたにすぎない。文章の中心のことを主題（テーマ *theme*）という。たとえば、主題はゴムのヘ、そのようなものだ。

文章の書き手は、あること（主題）を言いたいために、例を挙げたり、説明したり、構成を工夫したりして、長々と（!?）文章を書いていく。そこで読み手である諸君は、例や説明や構成などを理解しながら、文章の中心をとらえることへと、進まなくてはならない。へ、そはどこかと探すわけである。

主題のとらえ方

事実や知識を基にしながら、考えを推し進めていくような文章がある。評論文、新聞の社説などである。このような文章では、主題は、中心となっている考え・思想である。たとえば、次の例文を読んで、主題をとらえてみよう。

【例文】青い時間

本のおもしろさ、というのには、二つの面があると思う。

一つは、本が現実から離れて、頭や心を、別の世界に連れていってくれる、というおもしろさ。

もう一つは、しかも、その別の世界で体験したことが、自分に役に立つ、ということ。この二つ

羽
仁
進

